

# 岩手県総合計画審議会 第3回「ゆたかさ」検討部会発言記録

日時：平成25年6月10日（月）13：30～15：30

場所：県庁 8階 8-E会議室

## ■出席者

別紙出席者名簿のとおり（「ゆたかさ」検討部会委員7人）

なお、報道関係の傍聴者は2社（岩手日日新聞、河北新報社）

## ■配付資料

別添のとおり

## ■説明

### (1) 先進地視察の概要報告

平成25年2月28日（木）に行われた「長野県下伊那郡下條村視察会」の概要について、視察会に参加した山田座長から、資料1-1～3を用いて概要を説明した後、質疑応答を行った。

#### ●藤井委員

下條村は山村ですか？

#### ●山田座長

基本的に山がちと言ってよいと思う。村の規模も大きくないので、行政効率はやい。

#### ●藤井委員

本県の旧川井村のようなところではないと。

#### ●山田座長

はい。第3次産業の構成比が高いと聞いている。隣接の飯田市に働きに出ている人が多い。逆に下條村に働きに入っている人もいる。行き来は多いようであり、飯田市のベッドタウンという言われ方もしているようだ。

#### ●鎌田委員

自分達で工事などもやるとのことだが、業者との軋轢はどのように打破したのか。

#### ●吉田委員

業者からの反発は当初あったようだが、村長さんのリーダーシップによって進めてきたようだ。周辺の飯田市などの工事もあるので、あぜ道を舗装するような小さな工事は大きな問題にならなかったようだ。住民が自分達で工事をやることで愛着もわくようだ。

#### ●鎌田委員

医療費無料化も、住民に費用を意識してもらうため、一旦窓口で払ってもらって、2か月後に償還するなど、行政もいろいろと大変だと思うが、その他に行政で取り組んでいることがあるか。

●吉田委員

役場に全部の課が固まっているのではなく、各施設に課があり、そこが住民の方と常に対話しているので住民のことが良く目に見える。職員は兼務が多いので大変だと言っていた。

●藤井委員

コンパクトシティではないけれども適正規模の村ということですね。

●谷藤委員

資料7頁の中ほどに、総人口4,200人のうち、1,172人が村外で仕事をしているとある。大体1/4です。逆に入ってくる人も589人で15%位ですか。この数字は大きい。山村ということで、岩手県でいえば普代村あたりと比較すると間違ってしまう。規模は小さいけれども滝沢村に近い印象だ。ただ、そこで自分達で道路工事などをやれるというところがすごい。

●吉田委員

昔は各地区から人を出しているいろいろやるという風習があったのに、松戸市のすぐやる課ができたあたりからおかしくなってしまった、役所任せになってしまったと言っていた。昔はそうではなかったのもそういうことを復活させたかったということだった。

●鎌田委員

職員数37人で4,200人の住民をみるという意識がすごい。

## (2) 県民意識調査の結果報告

事務局から、「平成25年県の施策に関する県民意識調査結果の概要」について、資料2を用いて説明した後、質疑応答を行った。

●山田座長

これまで、「ゆたかさ」についてアンケートしたことはなかったですね。

●事務局

今回が初めてだ。昨年度、部会が設置されたことを受けて設けた設問なので、時系列での比較はできない。

●鎌田委員

この数字（ゆたかと思う人の割合）は、正直、少ないと思う。ゆたかと思う人が6～7割位あってもいいのかなと思っていたが、4割程度しかないのか。

●谷藤委員

若い人でゆたかと思う人が多く、年配の方はそうでない人が多い。年配の方は、かつての高度経済成長期とかバブル期のことが実感的なイメージとしてあって、それに比べて今はゆたかでないと、物質的な、金銭的なゆたかさとして思っているのではないか。若い人はその時期のことを知らないで、別段暮らしに困っていないしという感覚で答えているのではないか。さらにいうと、ゆたかであるかどうかを問題にするのは年配者の感覚かもしれない。若い人たちはそんなことを考えたこともないのかもしれない。

●鎌田委員

そういう面もあるかもしれませんね。

1年未満の人の方がかえってゆたかと思っている人が多い。いいところだと思っている人が多い。長く住んでいる人がいいところを忘れてしまっている。

●中村委員

クロス集計をみると、物理的な満足なのか、精神的な満足なのか、はっきり分かれているのでデータとして面白い。他県との比較があるとよかった。

●鎌田委員

こういう調査も北3県連携してやるともっと面白いと思う。

●中村委員

都市部ならゆたかと思う人が2割程度で、今回の結果は良い方なのではないかと思っている。

●谷藤委員

6頁の表4について、ゆたかと思っている人達は、生きることにそんなに困っていないと思う。ゆたかと思わない人は、生活にある種の困難を感じているのではないかと思う。

●藤井委員

ここにはっきりと出ていますね。ゆたかと思わない人はまずは働く場所。

●谷藤委員

まずはお金の問題があるし、差し迫った問題として命の問題と介護、福祉の問題がある。この2項目が50%超えている。3番目の項目と20ポイント以上の差がある。ここは大きいと思う。

●吉田委員

回答者は高齢者が多いですね。

●谷藤委員

アンケート調査は、アンケート票を発送する段階では層化二段無作為抽出という正当な方法をとっているが、戻ってくる回答が無作為になっているとは限らない。回答者の職業の属性をみると、「会社・団体役員」が多いと思われるところがある。そのようなことが集計結果に及ぼす影響も頭

に入れておかなければならないと思う。

### ●藤井委員

アンケートの回収率が67%というのは高い。大学がやる調査だともっと低い。

アンケートはゆたかさについてだけ聞いているのかと思ったらその他のこともいろいろ聞いて、時間のある人、責任感をもってやる人でなければ書けない内容になっている。

### (3) これまでの議論の概要説明

事務局から、これまでの議論の概要について資料3-1、2を用いて説明した。質疑応答はなかった。

### ■意見交換

#### ○山田座長

- ・今回の部会の議論まではかなり自由に発想いただき、次回以降はとりまとめに入っていくことになる。
- ・「ゆたかさ」の定義、そもそも「ゆたかさ」についてなど、今日はご自由な発想で意見を出し切っていただきたい。

#### ○菅原委員

- ・奥州市水沢区で中間支援NPOの代表をしている。
- ・団塊の世代の代表者であるが、若い頃は仕事中心で働きづくめであった世代と言える。若い頃、自分達が新しいことをしているつもりで、親たちが作ってきたものを随分と壊してきた気がする。
- ・経済的豊かさを求めることは必要ではあったと思うが、結果として、近所づきあいを全く考慮しない住宅を作ったり、車で移動しないと物が揃わない街づくりをしてきた。
- ・「ゆたかさ」というテーマについて、まず、現代は田舎であっても現金がないと暮らせないので、所得向上のための施策は大事になる。その一方で、住民の小さな支えあいを育てる人材が必要となる。

#### ○山田座長

- ・下條村でも、一貫して「人づくり」を重視していたという印象だ。将来にわたりコミュニティで人づくりをしていくということと共通する部分があるように感じた。

#### ○藤井委員

- ・子どものころから大学生まで高度経済成長で、7年で所得倍増の時代であった。工業社会中心にもものづくり産業、重厚長大産業が伸びていた時代で、一方で公害の問題が発生して、その後にオイルショックも起こった。「ゆたかさ」と言えば、経済性を指していたが、今の学生はそうのように考えていないように見える。
- ・「ゆたかさ」の視点で3つの視点、切り口がある。

##### ①県民所得

依然として、岩手県の県民所得は全国で下から 4~5 番目という発表を目にした。若い人は最低限の稼ぎがあればいいという人も多いようだが、やはり経済的な視点も必要。

## ②QOL (クオリティオブライフ)

生活の質を高めるシステムがあるかという視点がある。命の安全を考える、医療・福祉・教育という視点は大事。救急車が到着するのに 30~40 分かかる田舎では困るし、逆に都会ではたらい回しで医療を受けられない例もある。

## ③自然環境

他にない岩手の良さとしては、自然環境がある。

## ○山田委員

- ・この部会のミッションとして、県民計画のアクションプランに掲げる「県民所得の向上」というテーマが 1 つあり、そうは言っても経済的指標のみでは計ることができない「ゆたかさ」というものもあり、この 2 つがテーマになってくると思う。
- ・県民意識調査の結果として、「ゆたかさ」の実感に際し、「働く場」や「医療・介護・福祉」などの要素の重要性をあらためて思い知った。

## ○藤井委員

- ・「生活に不自由しない」ということを考えた場合、東京で 25 万円の収入で暮らすのは大変だが、盛岡であれば 15 万円でなんとかなるという比較もある。

## ○吉田委員

- ・南部地方、岩手県の女性は強く、活躍もしている。
- ・下條村で感じたことは、子育て支援を推進するなど、福祉に積極的に投資すれば企業が目を付けて進出してくるということ。質のいい保育所が近くにあれば、そこを狙って企業が進出してくることもある。

## ○藤井委員

- ・福井、石川、富山の北陸三県は、女性の就業率、三世代同居率が高く、生活の満足度も高い。

## ○谷藤委員

- ・女性の就業率について、かつては出産・子育て期に一時的に下がる「M字型」と言われていた。今は、下がり方、上がり方がともに減って台形に近付いている。

## ○中村委員

- ・パートナーの男性の収入も少なく、仕事をやめられないということもあるのではないかな。

## ○鎌田委員

- ・共働きだと保育料が最高額となってしまう、一人の時の収入・支出とあまり変わらない。共働きの夫婦の保育料を安くする制度があつてよい。

### ○中村委員

- ・家庭全体の総所得で計算されてしまうので、保育料が高額になってしまう。

### ○藤井委員

- ・ギリシア、イタリアなどは女性の就業率が低い。アジアでは、韓国がM字の下がっている部分を押し上げようとしている。中国は完全に夫婦共同で一人っ子を育てる体制である。

### ○谷藤委員

- ・世の中から、普通の仕事がなくなっていくという危機感を持っている。工場などで、特殊な技能以外の仕事はどんどんロボットに切り替わっていく。昔は、工場に働きながら徐々にスキルを向上させることができた。事務職についても、パソコンなど求められるスキルがどんどん変わるので、一度非正規雇用になると正規雇用に戻るのが難しくなった。
- ・銀行でも 30 年前は札束を数える技能が必須だったが、今は全く必要がない。
- ・普通の仕事がどんどんなくなる中で、子どもに何を教えなければいけないかを考えなければならぬ。
- ・大学を卒業しさえすればほとんどの人が就職できる時代ではない、という問題意識は持っておいた方がよい。
- ・考えを進めると、誰かに雇ってもらおうという発想では就職ができない時代となっていくということ。少ない額で「身の丈起業」を進めていくことも必要ではないか。
- ・長いこと企業誘致に力を入れて、バブル期には一時的には成功したと思った。コスト競争で中国に負けて岩手から企業が撤退していったわけだが、今、中国の製造業の就業者もロボットに置き換わることで減っているという。これから企業を誘致できても働いているのはロボットという状況で、数百人単位で雇用が保障されることはあり得なくなっていく。
- ・その中で、1つは伝統技能をしっかりと継承していく視点が必要。もう一つは、ロットが少なくても販売する方法ができているということを確認する必要がある。3Dプリンタを使って少量多品種のものづくりをしたり、「人口」検討部会の工藤昌代委員が専門であるが、インターネットを使って少ない量でも販路を拓くことができる。
- ・大きな視点で図面を作り、人づくりまで含めて仕掛けを作っていく必要があるのではないか。

### ○菅原委員

- ・そうすると教育の在り方も変わってこなければいけない。

### ○鎌田委員

- ・教育と関係があると思うが、競争心がなく、みんなと同じ仕事、みんなと同じ休みがいい、と言う新入社員が多い。
- ・先生が子どもを「さん」付けで呼んだり、男女が混じって徒競走をしたり、自分達が子どもの頃と、学校教育は随分変わった。
- ・中国では、二人目の子どもを産むには国にお金を払わねばならない。将来様々な場面で競争に勝ってよい暮らしをするための、小学1年生から休みもなく朝から晩まで勉強しているという。
- ・日本でも、もう少し競争心を育むようにしてもよいのではないか。若い社員の中でも仕事ので

きると感じる社員は独立心があり、起業して独立していく者もいる。

- ・水産加工業も機械化が進んでいく。中国でも外資系企業の賃金が上がり、生産拠点がタイやミャンマーに移ってきている。
- ・自動車の生産にしても、トヨタで1,000万台の販売が目標だと言っても、日本で製造しているのは300万台にも満たないと記憶している。

#### ○谷藤委員

- ・何かをやる時の起点は、農業や漁業にならざるを得ない。

#### ○鎌田委員

- ・今、社員を募集しても人が集まらないが、人の手でないとできないこともまだまだあり、海外とも競争が激しくなる中で、そういう部分をどうにか生かしていけないかと考えている。

#### ○谷藤委員

- ・鎌田委員は世界を相手に競争していらっしゃるが、社員一人ひとりが世界と戦っているという意識を持つていくことが必要になってくる。

#### ○吉田委員

- ・中国のある工場には「価格は中国、品質はドイツ、サービスは日本」という標語が掲げられているという。中国の方は、日本のサービスを最も尊敬している。おもてなしの心や、きめ細やかさという他国にはない個性的な良さというものが教育の次の目標となるかもしれない。

#### ○谷藤委員

- ・達増知事が言い始めた「ソフトパワー戦略」は重要かもしれない。岩手の人は商品の開発の際に中身は凝るが、パッケージやデザインに気が回らないということをデザインの先生からは指摘されることが多く、そういったものも含めたソフトパワーは重要である。

#### ○菅原委員

- ・水沢のお菓子で「麦つき節」というわらび餅にきな粉が乗ったようなお菓子があり、粉っぽいために車などで食べると汚れてしまう。ところが、あるコンビニエンスストアでは、アイスのような深いカップで売っており、車で食べても汚れない。そのような、客目線での独自の発想が必要。

#### ○谷藤委員

- ・大手菓子メーカーの商品ではなくて、〇〇商店のどの店でしか売っていない商品というものが貴重になってくる。

#### ○藤井委員

- ・昔の時計は自動巻きで、非常に高価であった。今、クォーツの時計やデジタル時計で正確に時を刻むということであれば、1,000円で十分な時計を買うことができる。

- ・現在、日本の時計産業の輸出額は 1,000 億円くらいと聞いている。一方で、クォーツ時計の登場で日本製品に一時的に席卷されたスイスは、国を挙げて高級品化に成功し日本の 10 倍の 1 兆円の輸出額となっているとのこと。
- ・色々な業種、100 人規模の会社が世界に商品を送り出して、ブランドをそれぞれ高いレベルに保っている。
- ・企業の規模に関わらず、伝統的な岩手ならではのレベルが高い工芸・技能を保有していれば、世界を相手に製品を売ることができる。

#### ○中村委員

- ・二戸の「南部美人」さんは、冷害に強くて味もいい酒米を県と共同で開発しており、その酒米の生産契約を地元農家との間で結んでいる。
- ・現存する伝統技能を活用することも大切だが、そういったものがない地域で、世界と戦うためには、新たに生み出していってみんなで盛り立て行くことが必要。各自がバラバラで頑張ってもダメ。
- ・TPP はすごく気にかかっている。

#### ○谷藤委員

- ・自由貿易推進の世界的な枠組みとしては WTO があるが、全世界での合意が難しい状況があるので、個別に FTA や EPA が結ばれるようになってきている。
- ・個人的には、TPP のような中 2 階的な枠組みではなく、アメリカなどと 1 対 1 で FTA あるいは EPA の交渉をするのが良いと思っているが、枠組みはどうあれ、自由貿易化の流れは変わらず、関税でいつまで守れるかはわからないので、一次産業は開放されることを前提に準備していかなければならない。
- ・関税で守るのではなく攻めていかなければならない。日本の一次産業は弱いという前提で考えていたが、必ずしもそうではない。
- ・例えば、自由化により、ニュージーランドなどのリンゴが入ってきたが、品質に圧倒的な差があり、結局誰も買わなかった。日本の農産品はかなりレベルが高く、国際競争力がないわけではない。
- ・あとは、売り方やブランド、加工技術の問題。世界の情勢を見ながらマーケティングをしっかりして、それを現場にフィードバックし、ブランド化や商品開発を進めていくことができる人材を育成していくことが必要。今、そういった教育施設が必要ではないかという議論が一部では始まっている。
- ・また、日本の小売市場をスーパーが席卷してきたので、量がまとまらなければ勝負にならないということが常識であったが、最近では、IT 技術の発達によりロットがまとまらなくても売ることができるようになってきている。例えば、水揚げした魚の中に、他と違う種類の魚が 1, 2 匹混じっていた場合、これまではただ捨てるだけだったが、それを売ること始めた人もいる。売り方を工夫すれば何とかできるので、そうした工夫ができる人など、色々なタイプの人が必要。そうしたことを地道にやっていけば、自由化が進んでも地域が生き残っていくことはできると思う。

#### ○藤井委員



- ・大学関係者としては、頭が痛い問題。
- ・最近の学生は、専門的な何かをやりたいということではなく、誰もが知っているような企業に勤めることしか考えていないというケースが多い。
- ・また、いくらオートメーション化が進んでも、対人でモノを売っていく営業はなくなり、逆にロボットに対して人間が強みを有している分野にも関わらず、営業だけはやりたくないという学生も多い。

#### ○中村委員

- ・県北地域は、仕事内容を選んで、結局、職につかない人が多い。私の会社でも、半年募集をかけても、応募が一人もなかったし、クルマ屋やホテル業など他の業種でも採用には苦労している様子である。
- ・震災以降、そのような風潮が加速したように感じている。働かなくてもある程度の暮らしが保障されてしまっているからなのか、働かない人が多くなっており、深刻な問題だと感じている。
- ・働いていなければ月 10 万円位の手当がもらえるらしく、最低限の時給で働くよりは働かないほうがいいと考える人が多い。これでは何のための支援なのか分からない。働かなければ生活できないくらいの支援が大事で、働かなくてもよい支援は必要ないと思う。
- ・県民意識調査のアンケート結果では、働く場があることが最重要項目となっているが、これはどんなに満たされても一番に挙がってくると思う。働く場があるのに働かないという状況からすれば、産業が盛んで働く場に恵まれていれば豊かというのは、県北には当てはまらないと思う。
- ・「ゆたかさ」という意味では、お金をかけなくても豊かに暮らしていける感覚を身に付けることが大切だと思う。お金と引き換えに物理的な満足感を得ることに集中するより、そんなにお金がなくてもきちんと暮らしていけるし、家族関係もうまくいくのが岩手や田舎の良いところだと思う。

#### ○鎌田委員

- ・県南も同じような状況。求人をしていても人は集まってこない。
- ・私の会社で働いている母子家庭の女性は、「働きたいから働いているが、働かないで生活保護を受けた方が楽だ。」と言っている。生活保護の額を下げる代わりに、自分で働いて得た分をプラスにできるような、みんな一律でない考え方も必要だと思う。そうしたインセンティブがあった方が働くようになると思う。
- ・地域に引きこもりの子もいるが、夜中のコンビニのバイトなら人にあまり会わないので、働けることもある。引きこもりの子も考えれば働く場が出てくると思う。

#### ○藤井委員

- ・今 40 歳前くらいの人たちが第 2 次ベビーブーム世代で、200 万人くらいいるが、その人達が学生だったときにバブルがはじけたため、ずっと非正規雇用である人が多い。そうした人たちは年金を払っていないことも多いし、今後どうなってしまうのだろうと思う。
- ・加えて、今の 20 代を見ていると、非正規雇用どころか社会参画していない人が多い。

#### ○中村委員

- ・私の世代では、就職して 3 年くらいは我慢するのが当たり前だったが、今はすぐ辞めてしまう人が多い。親も「子どもの意思を尊重します。」などと言って、社会人としての心構えが教えていないと思う。
- ・そうした状況もあり、子ども達の教育には真剣に取り組んでいかなければいけないと思う。

#### ○鎌田委員

- ・岩手県の子どもは、高校に入ったら全員寮に入れるなどしてもよいかもしれない。
- ・自然が豊かだからか、岩手の人は、人が良くておおらかな所があると思う。競争心が弱いためか、周りを見ると引きこもりの子が多い気もするが、人の良さなどといった県民性は、岩手のゆたかさの一つにもなると思う。